

忍者

鬼火

池波正太郎



池波正太郎

鬼火——忍者小説集

一九九二年一月二十日 第一刷発行

著者 池波正太郎

発行者 鎌倉 豊

発行所 立風書房 りつぷう

東京都品川区東五反田三六一一八

郵便番号 一四一

電話 〇三(三四四七)一一九一

振替 東京五七四四九三

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

(編集協力) 株式会社アルク出版企画

© 1992 Toyoko Ikenami Printed in Japan

ISBN4-651-50290-3

落丁・乱丁本はお取替えします

目次

黒幕	5
鳥居強右衛門	31
首	59
鬼火	85
霧の女	111
白い密使	147

戦陣眼鏡

.....

173

槍の忠弥

.....

211

寝返り寅松

.....

241

失われた愉しみ

筒井ガッコ堂

267

鬼

火

——
忍者小説集

装画・蓬田やすひろ
装幀・芦澤泰偉

黒

幕

山口新五郎直友が生まれたのは、天文十三年という。

そのころは戦乱の世が、まさに高潮しつつある時期で、それまでの守護大名のほかに、武田、上杉、北条などの戦国大名が諸国に擡頭し、局部の戦乱が全国におよび、足利將軍の衰弱ぶりは、決定的なものとなっていた。

しかし、織田信長などは、まだ十一歳になったばかりで、父の信秀がようやく錢四千貫を朝廷に献じたりして、美濃の斎藤や駿河の今川などという大勢力を相手に苦闘をつづけていた。

尾張の土民の子の豊臣秀吉は九歳で、鼻水をたら

しながら、いつも腹を空かせていたのだろうし、徳川家康に至っては、三歳の幼児にすぎぬ。

さて、山口新五郎のことだが……。

彼は、丹波国・新郷にある赤井時家の城で生まれた。

赤井時家は、新五郎の祖父にあたる。

新五郎の父・勘兵衛直之は時家の四男であるから、新郷の城にいて父や兄をたすけ、諸方の豪族と戦いつつ、妻を迎え、子をもうけたのだ。

勘兵衛の子は、新五郎ひとりであった。

「只ひとりの男子が、こんなやつで……」

と、勘兵衛は嘆いた。

難産でもあったが、新五郎はすこぶる病弱で、天然痘をやったときも死にかけた。このため、母親ゆずりの美しかった彼の顔は痘痕の蹂躪するところとなり、

「わが夫にうとまれた上、このような面だちとなつては行末が思いやられる……」

母は悲嘆にくれた。

少年の新五郎は、

「こやつ、頸など、ひとにぎりじゃ」

と、父がいったほどの細い体つきだったし、ひまさえあれば居眠りばかりしていた。

「病弱ゆえ、心身が人一倍に疲れるのであろ」

などと母親は同情してくれたが、それにしても異常である。病弱のくせに幼いころから泣きもせず、また笑いもせぬ新五郎は、読書もせぬし、武術もやらす（やったら、たちまちに発熱したり嘔吐したり大変なさわざになる）とにかく、ぼんやりと目を細め、ひざを抱いて居眠りをするばかりだし、

「こやつ、啞か」

にくにくしげに、父の勘兵衛が怒鳴っても、ほとんど反応をしめさない。母の庇護がなかったなら、新五郎は父にしめ殺されていたかも知れない。

後年、新五郎は幼少の自分を思い出したのか、われから、「眠牛」などと号したが、とてもとても、

そのころになると眠り牛どころではない男になっている。

ところで……。

母が、新五郎十五歳の春に病歿をした。母も丈夫な女ではなかったらしい。

母が死ぬや、忽然として、新五郎は新郷の城から消えた。

いくら探しても見つからない。

「母御前さまが亡くなられたのでは、この城に新五郎さまの居場所もあるまい」

と、彼をあわれむ人びとは、うわさをし合った。

父の勘兵衛は、

「探し出さずともよいわ。あやつめがいては、このおれが恥をさらすばかりだ」

むしろ、ホツとしたようにいった。

兄たちの子の中には新五郎と同じ年ごろのものもいて、元気に槍をかつぎ初陣の戦場へのぞむ。それを見ているだけに、勘兵衛も肩身がせまかったので

あろう。

新五郎の行方は、その後、何年を経ても知れなかった。

「あのひ弱な体で生きておられる筈がない」

と、だれもがいったし、勘兵衛もそのつもりらしく、それでも息子の肌着を亡妻の墓に入れ、墓には新五郎の名をきざみこませた。

しかるにである。

何と二十余年を経た天正八年の秋に、新五郎が飄然と父の前へあらわれた。

この二十年間の天下の動静を語るまでもあるまい。いまや、織田信長が「天下人」の座への最短距離に立ち、威勢は海内にとどろきわたっている。

勘兵衛直之は、あれから赤井の本家をはなれて独立し、越後・山口を領して山口勘兵衛を名乗っていた。

越後・山口は糸魚川の南三里、姫川の東岸にあり、根知の谷間の辺鄙なところだ。あまりに辺鄙すぎて

攻めかかって来る敵もない。

ここへ、新五郎があらわれたのである。ときに三十七歳であった。

「い、生きておったのか……」

まげもむすべぬほどの禿頭になった勘兵衛は、茫然と、成長した息子を見つめた。

新五郎は牢人の旅姿ながら小ざっぱりとした衣服を身につけていたし、

「か、変ったのう……」

勘兵衛が驚嘆したように、小柄ながら下腹の張った立派な体格であり、鼻や唇の肉も厚く「あばた」だけはどうしようもなかったけれども……いかにも風雪にさらしぬかれた逞しさが看取された。

変らぬのは、眠たげな細い両眼のみであった。

「今まで、どこにおった？」

という父の問いに対し、新五郎は、

「諸方に——」

と、こたえたのみで、くわしくは語らず、

「ときに、その後、父上はおひとりで？」

「いや。去年、二度目の妻が亡くなつてのう」

「後つぎのお子は？」

「それが、女ばかり四人もじゃ」

「ならば、私めが戻りまいて、家をつぎましよう。

よろしゅうござるな」

「おお……よ、よいとも」

目を白黒させつつ、この老いた武將は、

（こ、これが、あの新五郎なのか……？）

まだ、夢を見ている思ひであつた。

この日から新五郎直友は、二十年前の自分が、そのまま父のもとで暮しつづけて来たような自然さで、根知谷の居館に住みつき、間もなく家督をついだ。

二

山口新五郎が父と再会したところには、すでに武田信玄も死んでいたし、父・勘兵衛が従っていた上杉謙信も歿している。そのほか毛利元就、斎藤道三、

今川義元、松永久秀、などという大名、武將たちも次々に死んでしまい、新五郎が生まれたころに變りつつあつた時代の様相が、また一つ新しく變つてきつていた。

信玄亡き後の甲斐の武田と中国の毛利、この二つの大勢力が織田信長によつてほろびたとき、天下は信長のものとなるであろうことは、だれの目にもあきらかに映じはじめた。

そして、武田はほろびた。

さらに毛利を、というところで、あの本能寺の變があつた。

この明智光秀の反逆による信長の急死は、にわかには豊臣秀吉の擡頭をよぶことになる。

山口新五郎が徳川家康に召し出されたのは天正十三年の正月だというから、彼は四十三歳になつていた。

父のもとへ帰つてから七年の間、彼は何をしてきたのか……。

一年のうち数度にわたり、新五郎は、

「ちよと出てまいります」

根知谷の居館を出て、数カ月を、長いときは半年一年を旅で暮した。

「いったい、どこへ出かけるのじゃ」

いくら勘兵衛がきいても、「別に……」とか「うむ……」とか、うめき声のような声を出すのみで、まったく反応がない。この点、子供のころのままの新五郎なのである。

（たよりないやつめ……）

勘兵衛は、じりじりしながらも、今となつては新五郎をたよるよりほかに道はない。ふしぎなことに、異母妹もよくなつくし、家来たちも新五郎の言動を信頼しきっている様子が見える。

むかし、戦場でうけた古傷が六十をこえた勘兵衛の起居を不自由にしていた。

中央では、大きな戦さの流れが大勢を決しようとしているのに、この山の中の居館は平和そのもので

あった。軍事的にも政治的にも、まったく用をなさぬ僻地なのだし、五十名そこそこの家来たちを抱えている山口勘兵衛の存在などは問題にされないのだ。（戦さがないのをよいことに、せがれめ、どこへ羽根をのばしに行くのか……？）

老いた自分にはあきらめきっている勘兵衛も、せっかくに後をついだ息子が、これから先、こんな山の中にいてどうするつもりなのだろう……と考え、ためいきが出た。

新五郎は旅から帰るたびに、数人の新しい家来を従えて来た。この家来どもは、入れかわり立ちかわり、根知谷を出て行く。そしてまた帰って来る。これらの家来たちが新造した新五郎の居館にいて、主と共に、しずかに暮しているのだ。

天正十二年の秋……。

「父上。そろそろ、山の中から出てもよいかと存じます」

と、新五郎がいった。

「何……」

「明年正月、浜松において家康公へ目通りをいたしまする」

「お前がか？」

「はい」

「ふうむ……ようも手づるがあつたな」

「相応のはたらきをいたしましたゆえ——」

「え……徳川のために、はたらいたと申すのか？」

「いかにも——」

勘兵衛には、よくのみこめなかった。

どこから連れて来たものか、得体の知れぬ十数名の家来どもと一緒に、新五郎はよく旅をするが、そんなことで徳川家康ともあろう大名の氣に入られるようなはたらきをしたとは、とても思えない。

「たのしみに、お待ちあれ」

いくらきいても、その「活躍」の内容は洩らしてくれず、せがれは侍臣八名を従えたのみで、また根知谷を出て行った。

せがれが帰って来たのは翌十三年の春である。

「父上。家康公につかえることになりました」と、新五郎がいった。

家康は去年、日の出の勢いの秀吉と長久手に戦い、痛撃をあたえている。だが、何といつても秀吉が天下を制することは判然たるものがあつて、それは山の中でちぢこまっている山口勘兵衛の耳へも入ってくる。

＊
「では、徳川の手につき、豊臣と戦うつもりか。危ういぞよ」

たしなめると、新五郎は、

「何、両家はいずれ手をむすびましょう。安心してござれ」

こともなげにいい、すぐさま旅立ちの仕度にかかった。

「み、みんな出て行くのか？」

「左様」

「どこへ行く？」

「家康公の命にて、駿河・興国寺の城を守ることに
なり申した」

「何じゃと——」

勘兵衛はおどろいた。

興国寺城は、かの北条早雲の旧城で、以来今川、
武田、北条などの大名が、交互に戦線の拠点とした
要衝である。

いまは、徳川家康の重要な出城の一つであつて、
小田原の北条氏に対しての前衛基地でもあるだけに、
家康は、この城を守らせる家臣の選択には入念をき
わめたといわれている。

そのように大切な城へ、新参の山口新五郎がえら
ばれて入るといふのだ。もっとも興国寺城には、松
平清宗という家康の一族がおり、新五郎は、この下
へつくことになるのだが、それにしても、破格の抜
擢というべきであらう。

根知谷を発した山口家の行列は、主従、侍女たち
もふくめて五十三名。もう馬にも乗れぬ老体を輿の

上でふるわせながら、山口勘兵衛は、

「もはや、どうにでもなれ」

と、つぶやいた。

すぐ目の前の、馬にゆられている新五郎の、むっ
くりと前ごごみになった背中では依然として沈黙して
いる。

（ほんとうなのであらうか、せがれが家康に目通り
をしたというのは……？）

山峡の道は、ふき出したみどりの鮮烈な色彩に包
まれていた。

中天から落ちかかる陽ざしをいっばいにうけた新
五郎の背中が、ゆらりとなった。

（や……？）

勘兵衛は目をみはった。

（せがれめ、馬上で居眠りをしておる……）
たよりなくもあり、不安でもあった。

山口勘兵衛直之は、この翌年に興国寺城で歿した。

勘兵衛が、もし数年生きていたら、地味ではあるが着実な息子の昇進ぶりをたしかめ得たことだろう。

勘兵衛が死ぬころまでの息子は、松平清宗の下にて相変らず何をしているのか知れたものではない存在にしか見えなかったのだ。家来たちも新参の主人の下にいて何事にも不自由な目にあっていたし、

（根知谷におれば、一城の主でいられたものを……）

と、勘兵衛は悔いた。

勘兵衛歿して五年目の天正十八年。すでに四国・九州を平定した豊臣秀吉は小田原の北条氏政父子を囲んだ。

北条氏を殪^{たお}せば、天下は名実共に秀吉のものとなる。

新五郎が予言したように、家康は五年前に秀吉と手をむすんでいたし、この小田原攻めにも、むろん一役を買った。

この年の春から秋にかけての小田原攻めは、まったく秀吉のペースによって勝利をおさめたが、秀吉

は無駄な戦闘をあくまで避け、得意の謀略作戦によって小田原城を落した。

山口新五郎が、この謀略戦において、どのようなはたらきをしたか、それをのべると一冊の本になってしまふ。

とにかく——戦後の新五郎が、一躍、下総・千葉郡のうち三百石を家康からもらったことによって、その活躍ぶりが察しられよう。それまでは家来とともども、家康から月給をうけていたのである。

六年後、新五郎は家康の近習に列し、上総・周^す准郡のうち二百三十石を加えられて合せて五百三十石となった。

三

これは、まだ山口新五郎が駿河守に叙任する前のことであるが……。

豊臣秀吉が、王城の地・京都をも制す〔天下人〕の居城として築いた伏見城の工事には、諸大名も大

いにはたらいたものだ。

このとき、徳川家康は普請奉行を命ぜられたのだが、工事の進行につれ、木材不足で音をあげたことがある。木材は家康の負担であるから、それが間に合わぬなどという失態を演じては天下の笑いものになるし、また秀吉に対しても面目を失することになるわけであった。

このとき、家康が重臣の本田正信と額を寄せ合い、顔をしかめて、

「間に合わぬか……」

「何せ太閤殿下の思うままに工事がひろがりますので、どうしても不足いたします」

「困ったの」

しきりに談合をしているのを聞いた山口新五郎が、

「おまかせ下されますよう」

と、いい出した。

「そち……」

家康は、やや、あきれ顔で、

「木材が、そちの頭の中からもひねり出せるのか？」

「はい」

「どうする？」

こんなときでも、新五郎は多くを語らぬ。主人に対しても亡父に対するときと同じような不得要領さで、

「おまかせ下されますなら、都合いたしましたよう」と、いう。

本多正信は、にやりとした。正信は徳川家きつての謀略家であり、彼が支配する諜報網の完全さは無類のものがある。その方面では、山口新五郎の直属長官ともいべき正信だけに、

「新五郎、たのむ」

とだけいった。

いままでも、この「新五郎、たのむ」の一言で、山口新五郎が不可能きわまるスパイ活動を何度も敢行し、成功していることを本多正信は知っていた。

新五郎が受け合って去った後、家康が、